

フューチャー・アースの推進に関する委員会
持続可能な発展のための教育と人材育成の推進分科会（23期・第9回）
議事要旨

日時：平成29年9月3日（日）10：00～11：40

会場：日本学術会議 5A-1 会議室

出席者：氷見山委員長、小松幹事、宮寺委員、小金澤委員、武内委員、田中委員、田路委員、日置委員、山口委員、福士委員、井上参考人、田中参考人

欠席者：中静副委員長、井田委員、花木委員、林委員、毛利委員、山形委員

資料：

資料1：前回議事要旨（案）

資料2：学術フォーラムプログラム

参考1：委員名簿

議事：

（1）前回議事要旨（案）の確認

- ・資料1に基づき、前回議事要旨（案）が確認され、了承された。

（2）フューチャー・アースの動静について

- ・氷見山委員長より、FEの動静の主な論点について説明があった。（資料なし）

・FEの動静について関連するところで、Future EarthはAmy Luers氏を新しいExecutive Directorに指名した。Luers氏は、20年にわたり科学・技術と政策とのつなぎ役として、民間企業やホワイトハウス科学技術政策局、シンクタンク等で持続可能性推進に携わってきた。また、Luers氏は初期のエンゲージメント委員会メンバーとして、設立時からFuture Earthの活動に貢献してきた。Luers氏は今年9月、正式に就任する。フューチャー・アース東京会議（10月19日から20日）に招聘し、武内委員に面会する予定である

・Future Earth、東京大学、ストックホルム・レジリエンス・センターが、2017年8月24-26日にストックホルムで、7th International Conference on Sustainability Science (ICSS)を開催した。この会議に先立ち、SDGs Labプロジェクトに5000ドルを提供し、SDGs達成に向けたアイデアとイノベーションを促進するために、SDG Labを公募した。300以上の応募から21のSDG Labsを選び、1プロジェクトに約50万円、お金のかからないプロジェクトに約10万円を援助した。第7回ICSSにはJSTの大竹先生および武内委員も参加された。スウェーデンでは、小中学校から持続可能性の考え方を教育していて、高校大学でさらに浸透するようになっている。

- ・IGU(International Geographical Union)に「Future EarthのためのGeography」とい

う Commission（研究委員会）を立ち上げたいという中国地理学会会長 Fu Bojie 教授からの提案が、アムステルダムで開催された IGU の役員会で基本的に承認された。

（3）本分科会後の学術フォーラム「中高生と考える『Future Earth と学校教育』」について

- ・学校教育の視点で生徒の成長を評価する必要がある。生徒が社会的意義を理解することが重要である。
- ・生徒は持続可能性に関し、微生物や風力発電などに取り組んでいる。
- ・逗子開成高校からは多くの生徒が参加する予定である。
- ・フォーラムの場合、アンケートを回収して、総合討論で議論するが、今回はどうするか。
- ・直接生徒の意見や質問を優先するほうがよいと思うので、アンケートの紹介はなくてもよいのではないか。
- ・事務局のアンケートもあるので、今回はなくてもよいことにする。
- ・1975 年 10 月、ユーゴスラビアの首都ベオグラードで、環境教育の専門家を集めた「国際環境教育ワークショップ」（通称：ベオグラード会議）が開催され、採択された「ベオグラード憲章」で、環境教育を促進することがうたわれた。しかし、教育には取り込めていなかった。ESD も中身はよいが教育に反映されていない。教育の研究でよい結果を出しても実際の教育には反映されない。FE もいきなり生徒に言っても意味はなく、蓄積のある高校で関心をもっている生徒にまず興味を深めてもらうことが重要である。内容について意見を伺いたい。
- ・学校現場では、ESD も FE もまだ浸透していない。戸山高校はレベルが高く、生徒の研究が FE の中に位置づけられるという意味は大きい。FE は何なのか、Co-production が何なのか、というようなことがわかるようなガイドがあると共通項として理解できてよい。はじめ、または、最後にまとめがあるといい。Future Ocean、持続可能性、研究連携の試みも理解できるとよい。
- ・研究と教育の分離が問題である。学校現場では学力テストの点数を上げることに注力している。学校教育と結合していくためには、新しいアプローチが必要で、地域レベルでの取り組みがやりやすい。例えば、ラムサールの協議会に参加し、イベントをつくり、学校の外側に教育組織をつくるという試みである。これは、研究課題そのものであり、SDGs 上に位置づけられる。
- ・未来館のコメントも同じで、SDG が知られていないので、国谷さんに来ていただいた。今の時点では SDGs は FE よりも浸透しており、抱き合わせて取り組んで行く必要がある。
- ・持続可能な社会をつくるために、初等中等教育に ESD、循環型社会の教育が必要である。
- ・高校で地理総合が必修化された。環境という科目がないので、地理は有力な環境教育の核になる。地理教育分科会の提言で持続可能性に言及している。
- ・学術フォーラムの役割分担を決めたい。受付を福士委員（責任者）、山口委員、日置委員、

会場係とコンピュータ係を小松委員とする。フォーラム終了後、速やかにホームページに発表したスライドを PDF で公表する。一つのファイルは 2M 以下とする。

- ・著作権の問題があるので公表用に編集したパワーポイントを送る。
- ・会場の撮影は許可する。撮影を避けたい講演者は事前に申し出てほしい。

(4) 来期への申し送り

- ・本分科会は期限付きの委員会である。分野別の場合、継続の場合には希望を出す。FE の委員会はどうか。
- ・FE の委員会は継続する予定。特任連携会員は学術会議以外の NGO、公務員、企業などから選ぶ予定。委員会は、「FE の推進と連携に関する委員会」となる。
- ・分科会を下に置くことは可能であり、人材育成は重要なので、そのように申し送りする。
- ・各委員から今期の委員会についての感想と今後の課題が述べられた。
- ・海洋学の立場から取組んできた。教育現場にどう FE を取り込むかが課題。
- ・環境に関心のある学生は多いが、大学ではそれに応えるプログラムが減ってきている。学生が社会をしっかりと見れるようにしたい。
- ・地域環境をやってきたが、世界のミニチュアが地域にたくさんある。地域の大学の役割が重要。ESD に期待している。
- ・大学で高大連携に取り組んでいるが、委員会で初等教育についても知ることができてよかった。「人新世」や「家族」の視点から地球環境を見るのは高校生にも受け入れ易い。
- ・学校教育の現場とりわけ小中学校がとんでもないことになっている。教育大学もひどい。研究が軽視され、テクニックが重視された結果、考える力をつける教育が危機に瀕している。
- ・なぜベオグラード宣言以降環境教育の普及がなかなか進まなかったのかを現在学術会議の「記録」に書いている。生徒にとってモチベーションが大切。
- ・主に文系の委員会で活動しているが、地球規模の議論にはなりにくい。この分科会ではそちらの議論も多く、勉強になった。
- ・FE では sustainability science が学術的な基盤になってきた。FE はプラットフォームであり、SDGs はそこで議論できる。sustainability を教え、sustainability に向かう人材を育てる必要がある。

(5) その他

- ・今期最後の分科会なので、議事要旨(案)の最終確認・確定を委員長に一任した。
- ・最後に、本委員会を精力的にリードされた氷見山委員長の労に感謝し、全員で拍手を送った。